人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。

マタイによる福音書7章12節

BAIKA 1878　145th Challenge & Elegance

2023年
創立145年

2023年（令和５年）
3月16日 第19号

梅花女子大学 チャペル・ニュース Chapel News

発　行
梅花女子大学宗教部
〒567-8578
茨木市宿久庄2-19-5
072-643-6221㈹
072-643-8997
E-mail skb@baika.ac.jp
澤山記念館１階

〈創立145周年記念礼拝の奨励より〉

「鷲のように翼を張って」

梅花学園 学園長　近藤 十郎

はじめに

「若者も倦み、疲れ、勇士もつまずき倒れようが、主に望みをおく人は新たな力を得、鷲のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れない」（イザヤ書40章30～31節）。

旧約聖書の預言者イザヤが残した言葉です。今から2500年以上もの昔、イスラエルの歴史のなかで、おそらく最も落ち込みの激しかった時代を生きた一人の人間が語った言葉です。イスラエル王朝の滅び、バビロニアへの捕囚という屈辱、廃墟と化した首都エルサレムの厳しい現実、神は選びの民を見捨てられたという魂のあがきと底なしの絶望感、イザヤはこうした歴史の現実を、時代の人々と共に味わうことを強いられました。にもかかわらず、彼は信仰によって立つ希望を見失うことなく、人々に神が約束された未来を遙かに展望し、慰めと励まし、イスラエル復興の預言を力強く語り続けました。時代の暗さと闇の現実が、否応なしに人々を絶望させ、未来を失わせ、ニヒリズムの谷間へと突き落としつつありました。

しかし、イザヤは確固たる信仰をもって彼の時代を生き抜き、暗い闇の世界を貫く光を見失うことはありませんでした。混乱と闇の時代に蔓延しつつあったニヒリズムの風潮にも、決して安易に妥協して自分の立ち位置を見失うことはなく、時代の暗さに迎合するようなこともしなかったのです。創立145周年を迎えた我が梅花学園の過去と現在、そして未来を考えるために、私は今日の記念礼拝で、預言者イザヤが語ったメッセージを、今の時を生きる私たちへのメッセージとして、改めてとらえ直してみたいと思っているのです。

梅花学園創立145周年の節目を迎えて

梅花は、今日1月18日をもって創立145周年の節目の時を迎えました。時に澤山先生若干26歳の若者にすぎませんでした。145年にも及ぶ梅花の歴史を振り返る時、これまでの長い年月、どの一時をとっても、主なる神様の尊い御心が働かなかった時間も空間もなかった、ということをまず確認しておかなければなりません。梅花の歴史は、澤山保羅先生を中心とする創設者の群れが描いた幻と夢、日本の未来を担う若者たちの教育、分けても時代をリードする自立した女性の育成を最大の課題として掲げ、文字通り粉骨砕身、自らの命をも献げて悔いなし、と奮闘した先人たちの祈りの証しによって形づくられて来ました。時代にあって自立した人間の育成を目指そうとした先人たちの祈りは、時として時代の流れに敢えて逆らってでも、夢を実現しようとする気概ある若者たちの育成、という点に集約されました。高邁な理想に裏打ちされた教育姿勢を貫こうとしたが故に必然的に遭遇する数々の苦労も、これらの先達たちにとっては、当然始めから予測されていたことでしたし、すべてのことは乗り越えなければならな

い必須の課題でした。外国の資金に頼らず、限られた人数の教会員と有志たちの献金だけが、梅花女学校設立の基金でした。実際の学園の経営上の困難も、これらの先人たちの心には既に前提としてしつらえられていた、ということでしょう。感謝すべきことに、梅花145年の歴史においてもその志が高邁である限り、いつの時代にもこうした夢と幻を祈りをもって共有してくれる人々が与えられました。また、そのような課題の共有が梅花のこれまでの歴史のなかで確実に受け継がれてきた、ということも事実でしょう。私たち、今日それぞれの立場で梅花に関わる者たちにとっても、与えられた課題はいささかも変わってはいないはずです。

預言者イザヤのメッセージ

「お前たちはわたしを誰に似せ、誰に比べようとするのか、と聖なる神は言われる。目を高く上げ、誰が天の万象を創造したかを見よ」(イザヤ書40章25～26節)。

人々は、暗い時代にはともすれば、自分の足元の世界、現実の世界に心を奪われ、進むべき未来を見誤ってしまいがちです。時代の人々は、「主の道は正しくない」(エゼキエル書18章25節)、「わたしの道は主に隠されている。わたしの裁きは神に忘れられた」(イザヤ書40章27節)と言って、時代の暗さと神の不当性を嘆き訴えました。預言者イザヤは、混沌と不安の中で自分の道を見失いがちであった時代の人々に、歴史を創造し導かれる主なる神の御心を求め、自らの立ち位置をしっかりと確かめて生きる信仰の道筋を整えるべきだ、と語りました。主なる神に望みをおく人は、鷲のように天高く飛翔し、どんなに走っても弱り果てることなく、歩いても疲れない、と語って人々への励ましのメッセージを語り続けました。それが可能になるのは、ただ一つ、ひたすら主に望みをおくことにある、

というわけです。

この数年、私たちの生きる今の時代、コロナ感染症の殆ど終わりを知らないほどの拡がり、うち続く戦争、分断や相互不信、飢えや貧困、格差といった悲惨な現実が、世界的なレベルで私たちを痛めつけています。混沌とした世相の中で、私たちもいつしか、前途を見失って右往左往してしまいがちです。私たちの身の回りでも、困難な課題が山積して身動きができなくなりつつあります。しかし、このような暗い時代だからこそ、先達たちの祈りにもう一度立ち返り、未来を積極的に、そして創造的に模索するチャレンジ精神を立て直す試みが必要だと思います。

歓喜の歌をもう一度

「悩みを突き抜けて歓喜に至れ！Durch Leiden Freude.」ロマン・ロランの『ベートーヴェンの生涯』の末尾を飾る言葉です。「不幸な貧しい病身な孤独な一人の人間、まるで悩みそのもののような人間、世の中から歓喜を拒まれたその人間がみずから歓喜を造り出す――それを世界に贈りものとするために。彼は自分の不幸を用いて歓喜を鍛え出す…(後略)」。楽聖と言われたベートーヴェンの生涯は、ロマン・ロランが証しするように、苦悩に満ちた生涯でした。音楽家、芸術家としてのたぐいまれな才能を正しく評価されることもなく、その生涯全体を通して、貧困と挫折、孤独の極みにあって苦悩し、喘ぐ年月を過ごさなければなりませんでした。彼の苦悩の極みは、よく知られているように、聴力を失う、ということにあったでしょう。この悲劇的な打撃は、音楽家、芸術家としてのすべての可能性を奪われる、ということを意味していました。オーケストラを指揮していたベートーヴェンの指揮にオーケストラの演奏が合わず、何度も繰り返さざるを得なかったということです。あまりにも有名な『第九』の演奏の際にも、聴衆の熱狂と大歓声が、彼の耳にはよく聞き取れず、見かねた歌唱者のひとりが、聴衆に彼の顔を向けさせてようやく演奏が観衆に感動を呼び起こしていることを理解させた、という逸話も、ロマン・ロランによって紹介されています。彼の命の終わりを迎えて、全財産を遺産として譲り渡そうとまで愛し信頼していた甥のカルルとの訣別の事実、その他にも彼を苦しめ結果的には命をも縮めることにもなった様々な苦難のできごとは枚挙のいとまがありません。にもかかわらず、彼はあの『第九交響曲』の終曲として、シラーの「歓喜の歌」を敢えてその当時には珍

しかった合唱曲として完結させたのです。「苦悩を突き抜けて歓喜に至れ」というフレーズは、いったいどのようにしてベートーヴェンの魂から湧き上がったのでしょうか。死の床にありながら、彼が書き残した手紙の一節に、こうあります。「辛抱しながら考える。一切の禍は何かしらよいものを伴って来ると」(『ベートーヴェンの生涯』岩波文庫版65頁)。聖書の言葉と重なる感動的な言葉でもあります。「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことがありません」(ローマの信徒への手紙5章3～5節)、また、「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働く」(ローマの信徒への手紙8章28節)とある通りです。すべての苦難や困難は、その終局には喜びと歓喜の歌ともなり得る、ということでしょうか。

結びに代えて　～澤山保羅先生の生涯に学ぶこと

創立145周年を迎えて、私たち梅花人にとって、今日澤山先生の生き様から学ぶべき課題は何か、私たちがもう一度心して確認しておかなければならないことがあるはずです。澤山先生の34年の全生涯を貫いていた精神は、一口に言えば、祈りの精神そのものでした。生来の病身、常に死に至る病との戦いを強いられながら、決して自らの夢を見失うことなく、ひたすら目標に向かって走り尽くされた先生の生き方を辿るにつけ、涙の出るような感動を覚えます。彼に寄り添い、彼の願いと祈りを共に生きようとした人々が次々と与えられたのは当然と言えば当然のことでした。黎明期を迎えてはいたものの、未来を見通すにはあまりにも不透明な時代でした。立身出世のために、あわよくば洋行を果たして、権力者や財閥になることを目指した若者たちも少なくはなかったことでしょう。澤山先生も決して例外ではなかったかも知れません。しかし、彼がアメリカの苦学の日々にあって出会った宣教師たちや教会人たちの崇高な生き方を知るにつけ、彼の思いは以前の彼とは180度の質的転換を実現させました。帰国後の澤山先生の働きを決定づけたのは、これらの人々との出会いと、彼自身が信じた信仰そのものでした。封建社会の旧弊が依然として居座り続けていた時代、混沌とした世相の中で、自らの信じた信仰の世界、教会の宣教とキリスト教の精神に基づく教育、とりわけ女子教育のために、先生は自らの命を献げたのです。先生のそのような祈りの献身の姿を、現在私たちが置かれた時代状況の中で、適切に翻訳してその精神を実践すること、そのために祈り、使命感をもって教育の業に励むこと、そのような献身の姿勢を実践すること、そのことこそ今、私たち梅花人の一人ひとりに求められているのではないでしょうか。

〈チャペル・アワーの奨励より〉

「向上心を持ち続けて」

梅花学園同窓会宗教委員長　浦野　祐美子

「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」(コリントの信徒への手紙一10章13節)。

本日、一卒業生である私がこのような場に立たせていただけることに驚きとお声をかけていただけたことに感謝の気持ちを隠し切れません。貴重なお時間おつきあいください。

最近ではコロナ第7波も少し減少気味になってきましたが、未だ規制のある生活を余儀なく過す日々が続いています。マスク生活も長くなってきました。その場その場の状況で上手く付き合うことが身についてきたのではないでしょうか。

今回、礼拝にあたり聖句を「コリントの信徒への手紙一」から選ばせていただきました。今の時世を反映しているのではないか、又私自身歩んできた道を振り返り、まさにその通りだと思えました。人は誰しも迷い悩む時があります。よい時ばかりではありません。困難に直面した時どうすればよいか。先ず原因を考えます。なぜこ

うなったのか。そして知恵を絞り解決策を考えます。色んな解決方法がないか。必ず明るい光が照らされ何か解決方法の糸口が見つかると思います。自分で見つける場合、周りの人の手助けがあって解決できる場合。そうして成功と失敗を繰り返しながら、考える力を身に付けていくのではないかと。それが生きる力につながるのではないかと思い、私はこの句を解釈いたしました。

梅花との関わり

それは突然の出来事でした。高校受検を間近に控えた中三の一月初旬、この時点で公立、私立の受験校をほぼ決めていましたが、息を吸ったら胸が痛くなる症状が続き、掛かりつけの内科医を受診すると「肋間神経痛」との結果が出、改善策として、重い物を持ってはいけない、大事な時期ではあるが通学カバンも重いので教材は学校に置いておくように。高校は環境のよい所が良いと言われました。それを聞いた時、私はこの先どうすればよいのだろうかどうなるんだろうか？　と落胆し、今まで描いていた夢や理想が崩れ落ち、とぼとぼと下を向いて帰宅した記憶があります。私以上に親が心配していただろうと思います。健康面を考え進言くださった医師の言葉を受け、そこから学校の先生と両親と、一から受験校の見直しとなりました。私が絶対に譲れなかったことは、四年制の大学に進みたい！　という強い思いでした。何故かというと、将来学歴が人生を左右する。友人達は進学するであろう。その友人達に負けるのは嫌だ！　今にして思えば見栄を張っていたのだなと笑えますが、その頃は真剣に考えていました。病気が癖になり悪化しては困るとの考えで、環境のよい立地に高校があり、なおかつ大学のある学校。当時はまだ女子の大学も少なく選択肢が数校に絞られ、女子校に抵抗はあったものの、慣れれば大丈夫かな、と空気の良い豊中に高校、茨木に大学のある梅花に決めました。見学もせず、願書を提出する間際、隣のクラス担任の先生に「土曜休みの学校を選んだんや」と言われびっくりしました。キリスト教の学校で土曜日は休み、日曜日に教会へ行くというのを初めて知った状態でした。英語の教科担当の先生より、「英語の梅花、と言われてるからしっかり勉強すればいいよ」と温かい言葉を掛けていただき、頑張ろうと思ったのも懐かしい思い出です。

無事合格し、大阪市内からの通学には時間が掛かりましたが、点数との競争とギスギスした日々を過ごしていた中学生時代とは全く異なり、女子校特有の開放感の中、伸び伸びと学習し、友人ともたわいない話をし、楽しい高校生活を送ることができ心にゆとりを持つことができました。初めて讃美歌と聖書に触れ、穏やかに授業が始まると新鮮な気持ちになったのを覚えています。何より健康になり、学校に通うのが楽しくて仕方がなかったです。休日の土曜日に編み物と華道を習い始めることにし、私にとってかけがえのない情操教育に繋がる学び舎となりました。

そして高三で大きな転機がありました。それは大学進学に向けての学科選びです。私は当然「英語の梅花」という観点から英文科に進学しようと思っていましたが、担任の先生が、「英文科に行けば、英語詰めの日々になるよ。日文に行っても英語は選択で学べるよ。将来何を学び、身につければいいかじっくり考えてみては。大学は自分の得意分野を伸ばす場でもあるのよ」と思いもかけぬ言葉を投げかけてくださいました。私は小学校一年から「字が汚いね！」と友達に言われたことに、小さいながらも悔しい思いをし、習字教室に通い始めました。負けず嫌いが反面教師となり、自分でいうのもおこがましいのですが、上達が早く書くことが好きになりました。高校生で特待生となっていたので将来師範免状を取得しようと、稽古に励んでいました。そのことを先生がご存じだったのか、英語より国語、古典が好きというのも先生は熟知されていたのでしょう。私がどうしようか悩んでいると感じられたのかも知れません。両親とも幾日も相談し、英文科にとらわれず、自分が一体どちらに向いているのか、興味があるのはどちらか！　じっくり考えた末、国語学、古文を通して日本の文化や歴史を奥深く学び、もっと日本語・日本文学について学ぼうと両親は反対しましたが最後は自分の意志で日本文学科に進学を決めました。先生に報告すると、「その方があなたに合っていると思う」と笑顔で返してくださいました。有難い先生のお導きの言葉には本当に感謝しています。これも私の人生における分岐点となりました。節目節目に助言をいただけたことの有難さを感じました。

大学の四年間、ゼミでは好きな

1979年梅花女子大学
卒業アルバムより

百人一首を受講研究し、毎年参加した日本文学科の文学旅行も楽しく大変有意義な学習の場でした。勉学のかたわら、同期が16人もいるマンドリンクラブに入部し、空き時間はほとんど部室にいました。どちらかというとクラブの比重が大きかったかも知れません。クラブ活動も含め充実した学生生活を堪能させていただきました。就職活動が始まると、掲示板を見に相談室にも頻繁に通い、就職部長の先生に適切なアドバイスを教示いただき、その甲斐あり2社最終面接まで進むことが出来、交通便の良い大阪駅前の企業を選び結婚までの六年間勤めました。

現在の私

子どものPTA活動などを通し、色んな会合に出る機会をいただき、人脈も増え、現在、公民館の館長として七年目、館の運営と地域の方々との繋がりを大切に地域の事業に関わっています。コロナ禍の影響で中止の事業が多く残念ではありますが、できることから徐々に手掛けていこうと創意工夫し計画しています。産学連携事業の一環として「子育て支援　絵本の読み聞かせ」を企画し、コロナが流行る前の2年間、本学こども学科の学生さんに来館いただき、乳幼児に手遊びや、数冊の大型絵本の読み聞かせなどで楽しい時間を担っていただきました。時機を見て、学生さんの勉強の場になればと再開したい事業です。又、人権擁護委員としては、この事案は人権問題になるのでは？と思われる方の相談を対面及び電話で受けています。私たち擁護委員は直接解決することは出来ませんが、相談者と法務局職員への取次ぎを担っています。相談者は、一人が寂しく誰かと繋がっていたいと思われる方が多く、話を聞くだけで安心される方が殆どです。最近ではSNSを利用した相談も増えつつあり、目下その対応の講習を受けたり、語彙力をもっと身に付けたいと思って取り組んでいます。その他、子どもと関わるのが好きなので、こども会や青少年に関わるお役目もいただいています。何れも楽しくつとめさせていただいています。

縁あって茨木の地に住み40年、一歩家を出るとスクールバスに遭遇しない日はありません。そこでも梅花との繋がりを感じます。学生さんを乗せ走っているであろうバスを見て、今日も梅花は躍動感に溢れ元気に動いていると嬉しく思います。オープンキャンパスなどの情報も知ることができます。

梅花に入学し、親身になって相談やご指導いただけた恩師に巡り会えたこと、コロナ禍の影響で最近会えませんが、それまでは月一のペースで会っていた、永く付き合える気の置けない友人達との出会いに感謝。そして、今、同窓会活動のお手伝いをさせていただいていますが、色んな分野で活躍されていらっしゃる大先輩の方々から、懐かしい梅花でのお話を聞かせていただき、年齢の垣根を越え交流できる喜びを感じています。それらは同窓会の会報誌「この花」に掲載できればと構想中です。思いもしなかった梅花との出会いで学んだ7年間、在学中は気付けなかったけれど、卒業後梅花で学べてよかった、共通項をたくさん分かち合える同窓生と強い絆で結ばれていると実感しています。皆さんの仲間入りをお待ちしています。

未来ある皆さんへ

私の時代約50年前、大学は英米文学科と日本文学科のみでした。今は豊富な学部、学科があり選択肢も多様性に富んでいます。夢や希望を抱き皆さんは在学されていることと思います。同じ目標を持ち、それに向かい日々努力し研鑽されているでしょう。誰にとっても人生を左右する分岐点が訪れます。皆さんはまだ若いですが、今までにも何度か体験されたことがあったのではと思います。それが今に繋がっていると思います。私は常日頃より自分の娘達にも言っていますが、皆さんにも伝えたいです。今しか出来ないこと、この年齢でしか出来ないことは迷わず実行してください。後々の財産、宝になります。但し、人の道を外れてはいけませんよ。振り返ってあの時ああすればよかったと悔いだけは残して欲しくないのです。失敗を恐れず前向きにトライしてください。傍観していても何も始まらない、先ずは自ら行動を起こすことが大切です。

「チャレンジ&エレガンス」素敵なスローガンです。今は吸収する時期です。色んな所にアンテナを張り巡らし、力を蓄え挑む。日本文学科卒の私としましては、綺麗な美しい言葉、正しい日本語を発して欲しいと加えてお願いいたします。

季節の花が咲き誇り、気持ちいい居心地のよい綺麗なキャンパスで学べる喜びを感じ、「向上心を持ち続けて」素敵な女性に成長し

てください。未来に夢を馳せ大きく羽ばたいてください。私たち同窓生もしっかり応援させていただきます。

私も「向上心を持ち続けて」を常に意識し、スクール・モットーを常に胸に刻み、与えられた役目を果たして行きたいと、この年齢になっても前向きに過ごしています。いろんな経験を重ね充実した日々を過ごせるのも、決して私一人ではできず、家族はもとより私を支えてくださる多くの周りの人たちのお陰だと思っています。いつまでも続きますように。それには先ず自分が、心身共に健康であることが重要です。学生の皆さんも健康に留意され、明るく輝き元気で充実した楽しい日々を学友と共に過ごし、大輪の華を咲かせてください。

本日は取り留めのない話を最後までお聞きくださりありがとうございました。私自身貴重な体験をさせていただきましたことに感謝申し上げます。

最後に長い歴史を誇る梅花学園、今後創立百五十周年に向かい益々のご発展を心よりお祈りいたします。

〈チャペル・アワーの奨励より〉

「いまここにいることに感謝する」

本学看護学科教授　香川　由美子

皆様、こんにちは。本日は「いまここにいることに感謝する」というテーマでお話をさせていただきます。本日、このように奨励としてお招きいただき、ありがとうございます。まず、皆様とこの場でお会いできたこと、そして、このようなお話させていただく機会をいただいたことに感謝いたします。

思い返せば、ここで私が皆様にお話をすること自体、実はとても不思議な縁があると思っています。私が皆様と同じような年代、18歳の時、大学受験を失敗して、いろいろ紆余曲折があってここに至っておりますが、そのような受験の失敗がなければ、私は看護学を学ぶことも、看護師として働くことも、そして大学教員としてここにいることもなかったわけです。そもそも私は教育学部に行くつもりで大学受験をしましたが、失敗しました。もう40年も前のことですが、その当時私の両親や祖父は「女性に教育はいらない」という考え方であり、大学受験に失敗するような奴は能力がないのだから、早く働くのが良いという考え方でした。しかし、それではあまりにも悲しいと思い、唯一受けた滑り止めの短期大学に進学させてもらいました。その後、就職先の内定をもらった2年生の秋に、ある会で看護師さんと出会い「看護師の仕事は面白いわよ。やってみたら」と言われました。それまで看護師の仕事など、私には務まらないと思っていました。そもそも血を見ることが怖いと思っていたので、そのような性分ではとても医療者など向かないと思っていたのです。しかしその看護師さんはこともなげに、「そんなの慣れるわよ」と言われたのです。私はその言葉にはっとして、それから看護の仕事がどう面白いのかを本で調べました。すると看護のバックボーンとなる看護学の体系化はまだ緒に就いたばかりで発展途上であること、看護師の社会的地位もまだ途上であること、看護を学問として成立させるための人材が必要であり、現場では質の高い看護師が求められており、現場で起こっている問題がより学問的にも解明される必要があることが分かりました。私は一生働き続けていきたいと考えていたので、自身が一生をかけて取り組む価値のある領域であり、仕事であると思いました。そしてすぐに内定していた会社を辞退し、看護の勉強をすべく、受験をする準備に入りました。学校を卒業し24歳で看護師として9年働きました。その後は進学をし、

2022
梅花学園年間聖句

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。
どんなことにも感謝しなさい。

テサロニケの信徒への手紙Ⅰ　5章16～18節

大学で教育をするに至っています。そう思うと、18歳の時受験を失敗していなければ、今日の私はいないと思うと、とても不思議な気持ちになります。

さて、皆様と同じ年代の頃の私はというと、進学した短期大学で今日まで親しくしていただいている友人に出会うことができました。今、その当時からの友達との合言葉は、「コロナが落ち着いたら同窓会をしよう」です。40年に渡り付き合える友達を得ました。またその当時、仏教系の短期大学でしたので1年前期には「仏教学」を必修科目として取らねばなりませんでした。何回か目の授業で「あなた方は仏様に生かされているという感覚がありますか」と先生に問われました。その時即座に「否」と思いました。「私は一個の人間として自分の人生を自分で切り開こうと、多くの選択から選びとって生きている。生かされてなんかいない」という思いでした。しかし何故か、その先生の問いかけが今日まで、心に残っていました。当時、仏様という確証のない存在と、そのような存在に生かされているなどということは非科学的に思え、とても認めることはできませんでしたが、今は少しその意味を実感できます。こちらの大学に赴任してから、会議のたびにお祈りを私たちもしています。そのような影響があるのかもしれませんが、人間の意思や思惑を超越した節理の中で、人が生きているのだと思うようになってきています。それは、大学受験の失敗をしたにもかかわらず、看護学という世界で生き、このように皆様と対面する縁が結ばれている不思議からも感じていることです。自身の意思とは別のところで起こる、偶然ではない必然を感じています。

今回のテーマを定めてから、まず思いついたのは、『置かれた場所で咲きなさい』(幻冬舎文庫)という渡辺和子氏の著書のことでした。10年前ですが、２００万部を超えるベストセラーとなった個人の生きざまの記録ですが、ご著者の渡辺先生は、大学で37歳の若さで学長に就任しなければならないという、重責を担うことになった方です。その方は宗教家でしたので、ラインホルド・ニーバーという米国の神学者の詩の題名から、著書の題名を思いついたとのことでした。若くして学長という職責から、多くの苦労をされたことは想像に難くないです。著書のメッセージは、「置かれた場所で諦めず、最善を尽くすことで幸せになりなさい。それがきっとあなたの周りの人をも幸せにするから」ということでした。私が「いまここにいることは、きっと何らかの意味があり、いまここにいることで、自身のできることを尽くすことが、自身の幸せだけでなく、周りの人たちも幸せにすること」と信じ、進む方向付けをしてくれているメッセージに感じています。それは皆様においても同じかもしれません。

そしてテーマにある「感謝」についてです。感謝とは、自然や人から恵みを受けたことをありがたいと思う気持ちを意味する表現のことです。また感謝という漢字は、よく考えられていて、「感」の字には、「物事に接して引き起こされる心の動き」や「感動」の意味があります。「謝」は「言」と「射」でできていますが、「射」は矢を放つことであり、その結果、弓の緊張が解けることを意味します。そこから、言葉に出すことにより、心の緊張が解けることと理解できます。ということは、「感謝」とは、物事に接して、深く心が動いたことに対して、言葉を射る＝発するということになります。

私は18歳の時には、誰かに「感謝する」などを考えたこともありませんでした。若いが故に、エゴイズムが強かったのかもしれません。しかし、今は自然といたるところで、「感謝」や「ありがたい」という言葉が出てきます。様々な人に支えられ今日まで生きることができ、それを実感することが何度もあったせいだと思います。また、人だけではなく、人知を超えた節理の中で、自身が助けられて来たという思いもあります。そのようなことから、人や人ではない宗教的な礼拝物に対しても、自然と頭を下げることができているのかもしれないと思っています。

若い皆様に感謝を強要する気はありませんが、実はアメリカでは幸福追求産業が盛んなのです。心理学分野で「感謝」の研究などは、人はどのように幸福を感じることができるのか、を明らかにするために、ここ数年前より盛んになってきています。とても面白い傾向ですね。きっとアメリカにおいては幸福を積極的に追及しなければならないほど、社会の中での疲弊や不満、不幸感が蔓延している状況なのだと思います。

そのような流れの中で、感謝の効用が明らかにされています。米国の心理学者ロバート・エモンズとマイケル・マッカローは、一連の研究で被験者を2つのグループに分け、1つのグループには「ちょっとしたことでもいいので、毎日感謝できることを5つ書いてもらう」という実験をしています。被験者の感謝の対象は「両親や友人」「同僚」「好きな歌手」など、朝

起きた時から夜寝るまでありとあらゆることが対象としました。皆様がオシメンの活躍を見て励まされたり、そのことを感謝したりすることなども、含まれます。その結果、毎日一分から二分感謝する時間を取ったグループには、思いもかけない効果があらわれました。何もしなかったグループに比べて人生をもっと肯定的に評価できるようになっただけでなく、幸福感が高くなり、ポジティブな気分を味わえるようになったというのです。どうも感謝するという行為は、人の心を豊かにするようです。皆様にも、これから豊かな人生を歩んでいただきたいと思っています。是非このことを心の片隅に置いてください。不思議ですが、私も「ありがたい」と感じることが多くなったことで、人との関係がギスギスしなくなった気がします。また心に余裕がある感覚があり、何かがあっても焦ったり、バタバタしなくなりました。そして笑顔が出やすくなった気がします。

皆様はこれから長い人生を生きていきます。「いまここ」を大事にしていただくことは、きっと皆様の人生を切り開くことの力になると思います。そして素敵な時間を多くお過ごしください。きっと神様も皆様を見守ってくださっています。

〈チャペル・アワーの奨励より〉

「チャレンジのすすめ」

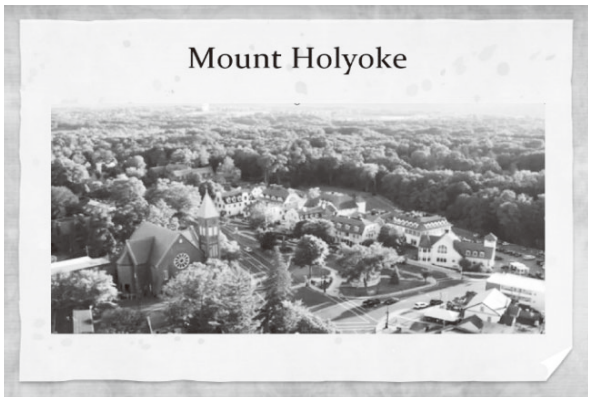
本学総務部付資料室　安田 行秀

今回は、2023年に創立145年を迎えるという梅花学園の長い歴史を多くの方々が献身的な努力によって支えてきたのですが、その中で「チャレンジのすすめ」ということで3人のチャレンジャーをご紹介させていただきます。

まずお一人目は、1878年に開校した梅花女学校に、翌年1879年にアメリカから来校していただいたコルビー宣教師です。コルビー宣教師は37年間梅花女学校で英語、聖書、音楽、裁縫の教師としてお働きいただきました。看護師の資格を持っておられたコルビー宣教師は、川口居留地で開催された日本プロテスタント宣教師全体会議の分科会において日本で最初に看護師教育の必要性を提案された方であります。

梅花女学校では看護師教育はできなかったのですが、明治20年に京都で同志社病院とその併設として看病婦学校が開校しています。

コルビー宣教師はアメリカ東部のニューハンプシャー州マンチェスターでお生まれになり、17歳のときに洗礼を受けられたのですが、その時に「あなたは海外に出てキリスト教の宣教を行ないなさい」という神の声を聴かれたそうです。Mt. Holyoke College に入学されて、看護の勉強をされ卒業後は教師をされたり、アメリカ国内でキリスト教の伝道をされておられました。そして1878年のコルビー宣教師が31歳の時にいよいよ神の声に従って海外伝道組織のアメリカンボードに海外伝道の希望を出されて、翌年の1879年に梅花女学校への派遣が決まり大阪に来られました。



コルビー宣教師が卒業された

Mt. Holyoke Collegeについてお話します。Mt. Holyoke Collegeはメアリー・ライオンによって設立されたアメリカで最初の女子大学です。アメリカに女子大学があるということを意外に感じる方もおられるかもしれませんが、セブンシスターズと総称されるマウント・ホリヨーク、ヴァッサー、ウエルズリー、スミス、ラドクリフ、ブリンマー、バーナードという7つの名門女子大学があります。ヒラリー・クリントン、ナンシー・レーガン、バーバラ・ブッシュといった大統領夫人がこれらの女子大学出身です。

現在のMt. Holyoke Collegeは3千校以上ある大学の中でも難関校とされていて米総合ランキングにおいて、Wall Street Journal / Times Higher Education 2019で第65位、Forbes2018では128位の評価を受けています。

学生数は2000人程度で、キャンパスの広さは800エーカー(約3・2平方kmで1・8km四方で東京ドーム約70個分)だそうです。

二人目のチャレンジャーとして実生(みばい)すぎ先生をご紹介させていただきます。

1945年の終戦後に梅花高等女学校は学制改革により新制梅花中学・新制梅花高校となり、梅花学園を復興させるために実生すぎ先生が第8代学園長に就任されました。実生先生は淡路島のご出身で、尋常高等小学校に通っておられた時に校長先生は渡米経験がありよくアメリカの話をされていました。それを聞いた実生先生が私もアメリカに行ってみたいですと校長先生に言われたら「女子がアメリカに行って何になる」という返事を聞いてむっとして、よし私は必ずアメリカに行こうと心に決めたということです。尋常高等小学校を卒業後に大阪へ出て中央郵便局に事務員として勤務されます。ある日郵便局の職員から近所にキリスト教の浪花教会というところがあり無料で英語の勉強会をしているということを聞き、喜んで勉強会に出席されることになります。浪花教会ではコルビー宣教師が英語の教師をしておられて、実生先生の勉強熱心さに心を打たれて梅花女学校の事務職員として働きながら女学校の授業にもでられるように手配されました。梅花女学校でも熱心に勉強されて、卒業後は神戸女学院専門部英文科に進まれます。神戸女学院でも成績優秀で、卒業後はそのまま神戸女学院で教鞭をとられることになります。その一年後にアメリカのミルズカレッジに留学され、小さい頃のアメリカに行こうという夢を実現されています。

ミルズカレッジを卒業後にミシガン大学に転入され実験心理学の学位を取得して卒業されて、日本に帰国後は神戸女学院に復職されました。

復職から2年ほど経った時に、実生先生のアメリカ留学経験を見込んで神戸の大富豪から思わぬ依頼が飛び込みます。大富豪の娘がアメリカ留学をしている青年とニューヨークで結婚式を挙げることになったので、娘に同行してニューヨークまで送り届けていただきたい。その後はヨーロッパに渡ってアジアも回って日本に帰国したらよいという依頼です。実生先生はその大富豪の依頼を受け入れて、一年半に渡る世界一周旅行を経験されます。実生先生は学園長の時に「男女の能力差はない。女といえども独立独歩でいけ」というメッセージを発して学生を激励されておられました。

3人目のチャレンジャーは2022年3月に梅花女子大学を卒業された佐藤友美子さんです。コルビー宣教師や実生先生はあまりにも皆さんからかけ離れた存在だと思いますので、もう少し皆さんに身近に感じていただけるチャレン

ジャーとして佐藤さんをご紹介させていただきます。２０２２年の大学案内の食文化学科の内定者インタビューに、私の出身高校と同じ高校を卒業されて京都で居酒屋さんの店主をされていると書かれていましたので、これはぜひ行かなければと思いお店に行ってみました。

５月の早い時間帯だったのでお客さんは他にいなくて私一人でした。

その後に高校同窓会の用事があって９月に再訪したのですが、その時はお客さんが５人ほどおられて忙しくされていました。少し手が空かれた時にお話しを聞くと、２０２１年の12月22日に開店されたとのこと。年末や１月は全くお客さんがなくて開店休業だったけれど、そのうちに商店街の方々と話しができるようになりお客さんが来られるようになったということです。佐藤さんは若い時なら失敗しても立ち直ることができるので、いろいろなことにチャレンジしたらよいと言っておられました。

〈チャペル・アワーの奨励より〉

「愛、深き淵（ふち）より。」

本学宗教部 宗教グループ
アシスタントマネージャー　奥西　まゆみ

「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない。わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」（ヨハネによる福音書15章４～５節）。

宗教部宗教グループでアシスタントマネージャーをしています奥西まゆみと申します。いつもは配信用の音声等の機材を操作しています。

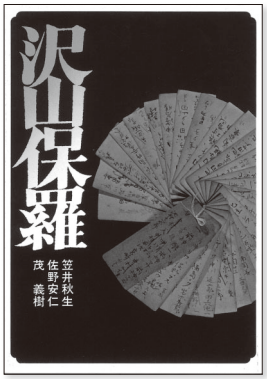
この奨励では、私がどのような経緯でキリスト教の信仰の道に進んだのかをお話しします。

私が小学校４年生の時に、当時小学校の教員をしていたクリスチャンの叔母からぶどうの絵が描かれた壁掛けをもらいました。そのぶどうの絵の横に今日選んだ聖書の箇所「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」という御言葉が書かれていました。これが、私が初めてふれた聖書の言葉です。でもその時はそれが聖書の御言葉であることは分かりませんでした。

私は梅花女子大学日本文学科で学びました。学生時代としては児童創作研究会、今の文芸部に入っていました。このクラブでは作家で児童文学科教授の川村たかし先生に原稿を見ていただきました。初めて書いた作品は「カブトムシ」という題でした。そして、それだけに飽き足らず早川良弥先生の第二外国語のドイツ語を取っていた３名で児童読書研究会キンダーガルテンを立ち上げました。３人はドイツ語を取っていたのでドイツ語の名前になっています。この同好会のメンバーを募るために宗教主事の石川冨士夫先生にお頼みして、梅花短期大学のチャペル・アワーの時間にキンダーガルテン募集のチラシを配らせていただきました。おかげ様で短大の学生も何名か入ってくれました。この同好会では茨木市の安威にある児童養護施設レバノンホームに行き子供たちに絵本の読み聞かせなどを行ったり、こども達と一緒に遊園地に遊びに行ったりしました。レバノンホームには石川先生もかかわっておられたので一緒にクリスマスに聖歌隊で出かけたこともありました。この時は後に宗教部で石川先生と一緒に働く事になるとは夢にも思いませんでした。レバノンホームは古い木造建ての一軒家で色々な課題を抱えたこども達が集まって暮らしていました。私は子どもたちを見て、お母さんがいないから寂しいだろうな、と思いながら絵本の読み聞かせをしていました。ホームの前に素朴な礼拝堂があり、みんな礼拝に行っていました。今でも宗教部の職員としてレバノンホームとの関わりが続いています。

大学時代に私の印象に残った先生は、同志社大学から非常勤講師で来られていた志賀英雄先生です。志賀先生の授業は国語の教職課程の「道徳教育の研究」という授業で、前期半年だけでしたが、なぜかとても印象に残っています。授業の中で志賀先生は、「私はク

リスチャンです。日曜日には教会に行きます」というなにげない言葉でしたがよく仰っていました。志賀先生の姿勢に私はとても関心がありました。なぜこんなに背筋が伸びているのだろう。なぜ志賀先生はこんなにも真剣でまっすぐなのだろう。志賀先生はゲーテのファウストと聖書、そしてベートーヴェンとユーミンがお好きでした。私も先生の真似をしてゲーテやベートーヴェンを読んだり聴いたりしていました。今思い返すと、志賀先生の心はいつも神様に向かっていて、信仰の軸があり、いつもぶれていなかったのだと思っています。教会で聖書を読むことは、事柄として読むのではなく、神様から聴く体験として確信することが大切ではないかと思っています。



印象に残っているもうお一方は、同志社大学から来られていた佐野安仁先生です。こちらもやはり教職課程で取っていた「道徳教育の研究」という授業でした。後期半年5講時の授業で窓の外の風景は、つるべ落としのように真っ暗になって行きましたが、佐野先生のあたたかい春のように明るい声で、とても安心して授業に集中できました。佐野先生もクリスチャンで『沢山保羅』（日本キリスト教団出版局）の御本を書かれています。『沢山保羅』の御本は私が学生のころから授業で使われています。聖書も賛美歌も新しくなりましたが、この御本だけはかわっていないのです。時代がかわっても読み継いでいく御本と言えるのではないかと思います。クリスチャンの先生方は授業の中でも神様の事を学生に伝えようとされていたように思います。授業の中にミニチャペル・アワーがあり、その言葉には愛があり、それは私にはよく伝わりました。

私が大学一年生の時にも一年間チャペル・アワーという授業がありました。アメリカ人のオードリ・ギルグ宣教師から神様についてのお説教をお聴きしました。当時はチャペル・アワーに出ないと卒業出来なかったので、一度も休まずに懸命になって聴いていました。この茨木ガーデンキャンパスの土地を献納して下さった田中とらさんのチャペル・アワーもありました。看護師をされていたので学生が煙草を吸うことについて注意されていました。オードリー・ギルグ先生が奨励の時は、英語だけのチャペル・アワーもありました。本学の卒業生で当時学園長をされておられた武田美代子先生の奨励もありました。

私は、梅花女子大学の日本文学科で日本文学を学んでいましたが、中でも、特に詩歌に興味を持っていたので詩歌を積極的に学びました。卒論は金沢の詩人の室生犀星について書きました。

その後、梅花短期大学の国語科の共同研究室でアルバイトをしていました。その国語科の共同研究室では、『沢山保羅』を書かれた笠井秋生先生が学科長をされていました。黒縁のメガネをかけられ専門は遠藤周作や芥川龍之介を研究されていました。『沢山保羅』の御本を読むと、笠井先生が書かれた文章がすぐに分かります。山口県出身の中原中也の詩を入れるところが笠井先生らしいと思います。この短大の国語科では、茂義樹先生を中心にお昼休みに先生方が集まって「聖書研究会」を立ち上げて皆で熱心に祈っておられました。茂先生も『沢山保羅』を書かれたお一人です。大学のチャペル・アワーでも澤山先生のお話をして下さいました。

そんなある日、聖和短期大学から梅花短期大学に移られ近代文学や文章表現を教えておられた大田正紀先生から、一度読んで見たらと手渡されたのが、今日の奨励題にさせていただいた星野富弘さんの『愛、深き淵より。』という御本です。この御本を大田先生は教材によく使われていました。

星野富弘さんは、1946年群馬県勢多郡東村（現・みどり市）に生まれ、1970年3月に群馬大学を卒業し、中学校の体育教師になられますが、同年6月17日、放課後のクラブ活動の指導中の墜落事故で頚髄を損傷、手足の自由を失われ、1972年群馬大学病院入院中、口に筆をくわえて文や絵を書き始められました。

1974年病室でキリスト教の洗礼を受けられ、その後、たくさんの詩や絵を描かれ多くの方々をキリスト教に導かれています。もし、私が星野さんのように若い日に頚髄を損傷してしまったら、生きることができたであろうか。きっと失望してしまっていたので

はないかと思います。星野さんの著作の中で特に感動したのが、初めて書かれたこの闘病記である『愛、深き淵より。』です。この御本は体の自由を失い絶望の淵にいた星野さんが、筆をくわえて綴ったいのちの記録であり、イエス・キリストに出会われた日々を綴られた感動の御本です。学生の皆さんにもぜひ読んでいただきたい御本です。神様の愛と星野さんのお母様の大きな愛に包まれて生まれた詩や絵は、私に泉のごとく生きる希望と勇気を与えてくれました。私は星野富弘さんの絵と詩に感銘を受けてその後、星野さんの色々な作品を読んだり、星野さんの展覧会に行ったりしました。私自身、星野さんと共に成長出来ました。

ここで『愛、深き淵より。』から星野さんの詩を少しご紹介します。

私の首のように
茎が簡単に折れてしまった。
しかし菜の花はそこから芽を出し、
花を咲かせた。
私もこの花と同じ水を飲んでいる。
同じ光を受けている。
強い茎になろう。

木は自分で動きまわることはできない
神様に与えられたその場所で
精一杯枝をはり
ゆるされた高さまで一生懸命伸び
ようとしている
そんな木を
友達のように思う

神様がたった一度だけ
この腕を動かして下さるとしたら
母の肩をたたかせてもらおう。
風に揺れる
ぺんぺん草の実を見ていたら
そんな日が
本当に来るような気がした。

（星野富弘『愛、深き淵より。』立風書房）

国語科で働いている時にも、大田先生とキリスト教について色々とお話しする中で言われた「あなたも一度、教会に行ってみたら」というその何気ない言葉が、教会に通うきっかけとなりました。梅花高校に通っていた友達と同じ教会に行くことにしました。そして26歳のクリスマスイブに牧師の岩村繁先生から洗礼を受けました。洗礼を受けてから、新たな人生が始まったように思います。

その後、資料室や図書館、幼中高事務室等、色々な部署を回り、梅花女子大学宗教部で働くことになりました。この仕事を通して、今までにどれだけの牧師先生に出会ったのでしょうか。当初、週に5回のチャペル・アワーがありましたので、日曜日の礼拝を入れると週に6回礼拝の時間が私に与えられました。

私自身は、大学の一年生の時にチャペル・アワーを通して神様の種が蒔かれたのだと思います。大学時代はわかりませんでしたが、人生を振り返って見てそのことがよくわかります。まさに、愛深き淵より神様が、私を救い出してくださったのだと。その後、非常勤で短大に来られていた三浦綾子研究家の久保田暁一先生、そして大田正紀先生が主催されていた日本クリスチャン・ペンクラブに入り、大田先生のご指導の元、今も証となる文章や詩を書いています。残念ながら久保田先生はお亡くなりになりました。日本クリスチャン・ペンクラブは、赤毛のアンを翻訳し日本に紹介した作家の村岡花子さんが初代会長をされていました。

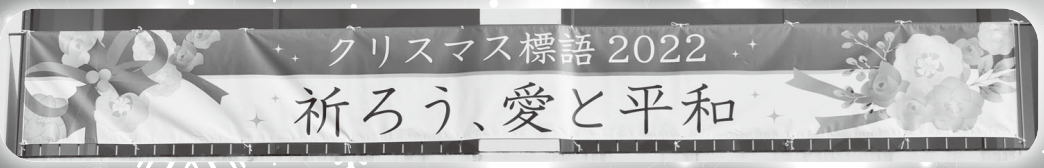
最後に私が若き日に創作した詩を一篇ご紹介して今日の証とさせていただくことにします。

キリストにつながったとき

奥西まゆみ

キリストにつながったとき
みえなかったものが
みえはじめてきた。
キリストにつながったとき
いえなかったＹＥＳかＮＯかが
はっきりいえるようになってきた。
キリストにつながったとき
いままでかんじなかったあなたの
愛を知った。
キリストにつながったとき
人を
自然を
夢を
大事にしようとおもった。
キリストにつながったとき
人のみにくさと
人のかなしみを知った。
のがれることのできない
死を知った。
そして
空の広さ
空のあおさ
空の深さをしった。
キリストにつながったとき
あしたの風がぜんしんに
運ばれているのを
感じた。
キリストにつながったとき
希望の光が
満ちあふれていた、
こんな暗がりの道にも。

本日はありがとうございました。



学園クリスマス標語

—2022年度クリスマス標語—

「祈ろう、愛と平和」学生会館前

クリスマスイブニング2022

2022年11月20日（日）　茨木ガーデンキャンパス

Merry Christmas

大学アドベント音楽礼拝

2022年11月28日（月）　澤山記念館礼拝堂（完全リモート配信）

大学クリスマス礼拝

2022年12月19日（月）　澤山記念館礼拝堂

「キャンドル点灯の奉仕をして」

情報メディア学科4年生　濱川　佳穂

前列中央が、濱川さん

クリスマス礼拝でキャンドル点灯が出来たことを嬉しく思います。高校生から梅花でキリスト教を学び、一番好きで興味があったのがクリスマス礼拝でした。チャペルで讃美歌を歌ったり、主の祈りを祈ったりと少し懐かしく感じる部分もありました。貴重な経験ができたことで素敵なクリスマスを過ごす事ができました。

「聖書朗読を通して」

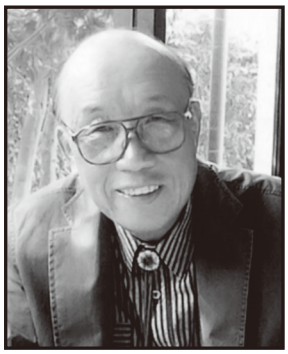
こども教育学科1年生　藤村　優姫

今回の聖書箇所について、コリントの信徒への手紙には、愛について記されています。愛に対して色々な考えや感じ方があると思います。私は朗読を通して、宗教部の皆さんや見に来てくださった方々からお褒めの言葉をいただき、愛を感じることができました。ルカによる福音書では、宿屋でイエス様がお生まれになるお話です。続きに三人の賢人が贈り物を捧げたお話があります。皆さんがお生まれになったときも、きっと贈り物があったと思います。私はこの箇所を読んで、自分が生まれたことや今生きていることに、改めて感謝したいと感じました。

追悼

止揚学園創立者の福井達雨先生を偲んで

本学宗教部 宗教グループ
アシスタントマネージャー　奥西　まゆみ



福井達雨先生

福井達雨先生が昨年9月6日に急性心筋梗塞のため90歳でお亡くなりになりました。毎年、澤山記念ホールや礼拝堂にて開催致しました梅花女子大学のチャペル・アワーに止揚シスターズの先生方とお越し下さり、お歌と奨励をいただきました。

夏休みになると止揚学園に本学の学生達と共に訪問させていただきました。下の写真は止揚学園で草刈をさせていただいた時に撮影しました。訪問するたびに色々な体験をさせていただきました。

神様の愛が詰った懐かしい故郷のような、温かな止揚学園。そして温かなまなざしで包み込むように愛をいっぱいそそいでくださった福井達雨先生と職員の皆様方。福井達雨先生を通して目に見えない大切なものをたくさん教えていただきました。

福井先生の歩まれた人生は、しんどい人生だったと思います。それでも、きっと「人生にイエスと言おう！」と仰ったと思います。

この出会いを神様に深く感謝いたします。福井達雨先生、どうか安らかにお眠りください。有り難うございました。

宗教部一年の歩み

宗教部はチャペル・アワー（礼拝）を守ることに重点をおいた一年だった。チャペル・アワーは学園の建学の精神を伝える重要な役割を担っている。宗教部は、心に残るメッセージを対面とライブ配信によるハイブリット方式により伝えることに全力を注いだ。

4月
梅花中学一年生のミニ礼拝と展示ホール見学

4月9日(土)に梅花中学一年生のミニ礼拝が10時10分から澤山記念ホールにて行われた。高田太先生が奨励を担当された。奏楽は水間泉先生。ミニ礼拝終了後、10時40分から学園資料展示ホールを見学された。

竹の子の販売

学内で収穫した竹の子の売上金は前期献金に充当した。

6月
青梅の収穫と販売

今年も、学内で実った青梅を有志の教職員・学生ボランティアで収穫し販売した。毎年、5月末から6月中旬辺りの適当な時期に収穫し販売しているが、今年は6月上旬に収穫した。売上金は、前期献金に充当した。

9月
口腔保健学科3年生の臨床臨地実習宣誓式

9月20日(火)に午前9時から澤山記念館礼拝堂にて口腔保健学科3年生69名の臨床臨地実習宣誓式が開催された。奏楽は水間泉先生、高田太先生から祝祷があった。

10月
建学の精神プログラム教職員研修会

10月26日(水)16時20分から澤山記念ホールで2022年度の建学の精神プログラム教職員研修会を開催した。司会は宗教部職員の奥西まゆみ。講師は日本基督教団泉北ニュータウン教会牧師の稲山聖修先生が「弱さの中で発揮される力―澤山保羅先生の祈り」と題して講演された。

11月
クリスマスイブニング2022

11月20日(日)16時30分から礼拝堂にてクリスマス礼拝を開催した。日本基督教団梅花教会牧師の山口恒先生が今年の学園クリスマス標語である「祈ろう、愛と平和」と題して奨励があった。司会は高田太先生、奏楽は水間泉先生が担当された。

17時20分から学生会館前でクリスマスイブニング2022音と光のハーモニー（点灯式）を開催した。奨励を高田太先生が担当された。

アドベント音楽礼拝

11月28日(月)13時からアドベント音楽礼拝を礼拝堂で開催した。奏楽は水間泉先生、司会は髙田太先生。梅花女子大学合唱団OGの皆様による「クリスマス・アドベントの歌」と題して合唱があった。

12月 クリスマス礼拝

12月19日(月)13時から大学のクリスマス礼拝を礼拝堂で行った。奏楽は水間泉先生、司会は髙田太先生。キャンドル点灯は情報メディア学科4年生の濱川佳穂さんと心理学科4年生の大薮佳音さんが担当した。聖書朗読はこども教育学科1年生の藤村優姫さんが担当した。日本基督教団南大阪教会牧師の尾島信之先生から「そこに愛はあるんです！」と題して奨励があった。梅花女子大学合唱団OGの皆様が参加してくださった。

1月 創立145周年記念礼拝

1月18日(水)午前10時から澤山記念館礼拝堂にて梅花学園創立145周年記念礼拝が開催された。学園長の近藤十郎先生から「鷲のように翼を張って」と題して奨励があった。

今年も澤山保羅先生墓前祈祷会は新型コロナウィルス感染防止のために中止した。

3月 大学・大学院卒業礼拝

大学・大学院の卒業礼拝を3月15日(水)午前11時に、礼拝堂からライブ配信で行い、対面参加も受付ける予定をしている。奏楽は水間泉先生、司会は髙田太先生が担当される。日本基督教団梅花教会牧師、梅花中学・高等学校聖書科非常勤講師の山口恒先生から「準備されていること」と題して説教をいただく予定である。

2022年度 献金のご報告

いつも宗教部の諸活動にご協力頂きましてありがとうございます。今年は下記のウクライナ緊急募金、新型コロナウイルス緊急支援募金・施設・団体に、集めた献金を送付いたしました。ご協力いただきました皆様に心より感謝し、ご報告申しあげます。

《 献金送付先 》

＊前期献金＊

・ウクライナ緊急募金	95,359円
・振込手数料(郵便局)	476円
合　計	95,835円

※上記の緊急募金は日本キリスト教協議会(NCC)からACT Alliance(アクト・アライアンス)に送金いたしました。

・大阪府「新型コロナウイルス助け合い募金」	20,000円
・パンダ園	20,000円
・止揚学園	20,000円
・救世軍希望館	20,000円
・レバノンホーム	20,000円
・大阪水上隣保館	15,000円
・振込手数料(郵便局)	1,006円
合　計	116,006円

＊後期 クリスマス献金＊

・大阪府「新型コロナウイルス助け合い募金」	19,000円
・パンダ園	14,000円
・止揚学園	14,000円
・救世軍希望館	14,000円
・釜ヶ崎医療連絡者会議(路上生活者支援団体)	14,000円
・レバノンホーム	14,000円
・振込手数料(郵便局)	1,006円
合　計	90,006円
総合計	301,847円

学園創立145周年 記念礼拝

2023年1月18日（水）午前10時～
澤山記念館礼拝堂

2022年度 チャペル・アワー感想文より

「チャペル・アワーへようこそ」
本学宗教主事　髙田　太先生

初めてのチャペル・アワーの授業がリモート配信であったのは残念でしたが、梅花女子大学におけるキリスト教精神とは何か、髙田先生のお話でよく理解することができました。

今では、人口の約3分の1がキリスト教であると聞き、世界中で信仰されている宗教であることは、多様性の受け入れが広がっている傾向でもあるのではないかと実感しました。千年ほど歌い継がれてきた讃美歌を歌い、主にお祈りを捧げることは、自分自身のためだけでなく、全ての人に今日も一日生きる糧が与えられるようにお祈りと感謝の気持ちを込めることこそが、愛を大切にする一つの習慣でもあると考えさせられます。聖書の言葉にあるように、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である」。この言葉は人を大切にするためにあり、人に自分の価値観を押し付けるのではなく、互いに理解し合い、価値観の違いを受け入れること、これが愛を持って人に接する行動だと学びました。キリスト教の愛ある行動や考えの教えをこれからも深く学んでいけることを楽しみにしています。

「喜ぶこと、祈ること、感謝すること」
梅花学園学園長　近藤十郎先生

学園長の梅花女子大学に対する思いがとても溢れたお話だった。長い歴史を持った大学であることはわかっていたが、まだまだ知らないことばかりだった。学園長のお話の中で、困難を逃げない。課題をしっかり持って挑戦する。上手く器用に人生を生き抜いていくという方法をとらない、などといった熱いお言葉をいただき、不器用な生き方でも失敗してもいいんだ、とあらためて今後の生き方について考えさせられた。

「思いきって生きよう」
日本基督教団梅花教会牧師
梅花中学校・高校聖書科非常勤講師
山口　恒先生

私は、挑戦することは大事だと思っていろいろ挑戦した経験があります。けれども、それは、ほとんどが成功しそうと思うものしか挑戦してきませんでした。今回お話を聞き、どうすればいいか分からないこと、結果がどうなるか想像がつかないことにも挑戦する大切さを学びました。失敗した人にしかわからない経験、善意でやったつもりが相手には喜ばれなかったこと。人間は失敗する生き物なので、失敗を経験し次にどう繋げるか、この4年間考えながら生きていきたいと思います。そして社会に出たとき、失敗を恐れず積極的に活動できるような人になりたいと思いました。

「愛が実を結ぶ」
日本基督教団南山教会牧師
村山盛芳先生

今日の話の中で共感したことは、「困難な時こそ人は前向きになる」ということです。人は逆境に立ち向かう時に力がわくというのはあると思います。自分の人生がうまくいっているときは考えもしないはずのことを、人生で何かに躓いたときにはじめて今までのことを振り返ったり、考え直したり、また新しい何かを始めたてみたりと、まさに自分もそうかなって思う時があります。自分の中でも大切にしている言葉があります。「苦しいときほど奉仕の精神」これを常に頭においています。苦しい時こそ、人に感謝して尽くすことで、また頑張れる。そんな気がするからです。あえて自分の気持ちを落ち着かせるのにもいいし、そうやって乗り切れることがたくさんあるなと思います。いつもチャペル・アワーでいいお話を聞かせてくれるのを私は密かに楽しみにしています。

「優しい思い出は未来への道しるべです。」
止揚学園園長　福井　生先生

人間というのはみんな、そこにいるだけで思ってくれる人がいること、喜んでくれる人がいること、そして笑顔でいることで、どれだけ周りの人に強い力を与えるのかということを、まこさんの話を聞いて改めてとても大切なことだなと感じた。だから、これからも私には周りに味方がいて一人じゃないということにちゃんと感謝しないといけないなと思ったし、日々の時間をもっと大切にしようと思った。

「なぜ学ぶのか」
日本基督教団高槻日吉台教会牧師
梅花高校聖書科非常勤講師
吉岡恵生先生

「なぜ学ぶのか」のお話を聞いて、今しか学べない、この学ぶ時間を大切に生きていきたいと改めて感じることができた。大学生の時にしか学べないこと、その時間をどう使うかしっかり考え、計画性を持ち、たくさんの知識を学びたいと思う。そして、知識を深めること、理解する大切さを学んだ。以前から、一人しかいな

い自分の存在を、たくさんの知識を持ち、活用できる自分になることが人生の課題であると思っていたが、今回のお話しを聞いてよりそう感じた。「生涯学習」は大切だと感じた時間だった。

「隣人を自分のように愛する」
社会福祉法人レバノンホーム理事長
日本基督教団池田五月山教会牧師
有澤慎一先生

今回は、礼拝堂にてお祈りをしました。イエスがおっしゃった掟で、同じ信仰の仲間だけを限定するのではなく、会う人全てを隣人とし愛しなさいということが心に響きました。自分と違う信仰の人達とはなかなかわかり合うのは難しいかもしれないけど、寄り添っていきたいと思いました。また、自分を愛することも頑張りたいと思いました。

「いけるみことばのままに」
本学心理学科教授　閑喜美史先生

自分の役割や、使命、そういうものがあってそれを探し求める努力、それを達成しようとする生き方をすることは、とても難しいことで大変だと思う。だけどこんな生き方ができる大人に、私もなりたいなと今回のチャペル・アワーを聞いて感じることができたし、自分の心に素直になることも大切なことだなと思うことができた。

「いのちのパン」
日本基督教団京都教会副牧師
入　順子先生

聖書ってなかなか読んでも理解し難いところがあるなと感じてきました。ですが、このようにひとつの意見として解説していただけることで理解が深まり、そのようにもとれるんだなと感じることが出来ました。

十円玉の話を聞き、心が温かくなりました。みんながしんどい中、そのような何気ない行動で多くの人が救われていると思うとすごいなと思います。私もなにか人のためになる行動をしたいと思いました。

「私のキリスト教体験」
本学情報メディア学科教授
遠山耕二先生

マタイの受難曲コラールを聞かせていただきましたが、キリストが十字架にかけられて民衆が嘆き悲しむ曲らしく、発声を抑えた合唱が、キリストに安らかに眠ってほしいという民衆の思いが強く伝わる曲でした。先生もおっしゃっていましたが、キリスト教ほど音楽の発展に影響を及ぼした宗教はないと感じました。

「真実に生きる」
日本基督教団島之内教会牧師
木戸　定先生

「喜ぶ人と喜び、泣く人と泣きなさい」ということや「愛すること」は一見誰にでもできるように思えるが、本当に難しいとわかりました。なぜなら、自己満足になっていたり、自分は完全であると勘違いしていることがあるからである。人の痛みや辛さを理解することは難しいが、まずは気持ちに寄り添うことから始めたいと思う。辛い目にあった時は試練だと思って成長できるよう乗り越えたいと思う。また、人との出会いを大切にしたいと思う。

「世界のはじめから」
日本基督教団近江金田教会牧師
横田明典先生

旧約聖書には人間の良いところと弱いところ、罪など闇の部分など書かれていて、今も昔の人もあまり変わらないと思えるので私は好きですとおっしゃっていましたが、私もその話を聞いてそう感じました。神様は、今も人間にとってなくてはならない存在であるのではないかとおっしゃったとき、ドキッとしました。心理学は歴史的に宗教とかかわりが強く、人が困難な壁に遭遇した時に「神様」と願うことで心が安らぐことがあることを知っていたからです。自分が困難に向き合ったり、立ち向かい生きていくのに必要な物事の一つなのではないかと思いました。今回講師の横田先生のお話はとても聞きやすく、面白いお話でした。

「後で分かる恵み」
日本基督教団宇治教会牧師
早瀬和人先生

早瀬先生がお話のはじめ、生徒に「皆さんはなんでここにいるの？」と問いかける場面に、見た目のお堅いイメージとのギャップを感じ、心をつかまれました。その後のお話でも、復活したイエス様と弟子たちとの出会いの様子を関西弁で面白くお話してくださり、聖書のお話をしてくださっているのですが、まるでコントを見ているような楽しいチャペル・アワーでした。しかし話の本質は、その時（今）はわからなくても時間が経つと気づくこともあるということ、聖書の話が心にスゥーと入ってきて、そのお話が、あの時私に語りかけてくれていたんだと気づくときがあるというお話であり、私にもその時がくるのだと考えさせられました。とてもわかりやすく学ぶことができました。

「世界を変える魔法の言葉」
日本基督教団千里聖愛教会牧師
中島正勝先生

感謝の言葉など、言った方も言われた方も幸せになれる魔法の言葉だと改めて気付かされました。愛のある言葉を普段から沢山言えるよう、意識していきたいです。

「新しい掟」
日本基督教団大阪教会牧師
本庄侑子先生

自己や自己中心的な思いがあると、どれだけ良い事や人のための行動をしても、それは自分自身のためであってその人のためではないと分かりました。またチャペル・アワーはイエス・キリストと過ごす時間だと再確認する事が出来ました。

「君に届く」
日本基督教団浪花教会副牧師
川江亜希子先生

この話を聞いて聖書の意味が少しわかった気がします。なにか辛いことがあった時確かに聖書の言葉でグッと来るものがあったことがあるなと今になって思いました。誰かに辛いことを打ち明けるのも大切な事ですが聖書の言葉を少しでも自分の心にとめておくのも大切なのかなと感じました。神様から残して頂いた言葉にこの大学生活を通して感謝出来る様な人になりたいとそう感じました。

「向上心を持ち続けて」
梅花学園同窓会宗教委員長
浦野祐美子さん

私自身、日々向上心を持ち、取り組むようにしている為さらに向上心を高めていきたいと感じた。向上心の「ある人」と「ない人」を比べると、人生経験と人間性が違う。向上心を持ち取り組み、人と関わっていたら、様々な人との「縁」があると思う。その「縁」の為に向上心を忘れない人でいたい。そのためには、自分が健康でいるにはどうしたらいいかが永遠の課題であると学んだ。

「今日のあなたの食卓には」
本学情報メディア学科准教授
森　美由紀先生

昔ソロモン諸島では同じ仲間同士なのに首を刈り、それを祀るという文化があったがキリスト教が布教したことによって改宗者が増加して最終的にはお互いに争うことがなくなったという話を聴き、宗教という存在は普段生きていて目に見えるモノではないが人々の文化や信念に深く影響して歴史さえも動かすのだと解釈しました。

「カトマンズの粉ミルク」
日本基督教団尼崎教会牧師
桝田翔希先生

今回の先生の話の中で、物乞いにはお金をあげない方がいいと書かれた本が出てきたと思いますが、とても難しい問題だなと感じました。確かにその先苦しくなってしまうかもしれないけれど、私はあげてしまいそうです。全ての子供が粉ミルクを飲めるようになれば良いと思いますが、とても難しいことだと考えました。

「愛、深き淵(ふち)より。」
本学宗教部宗教グループ
アシスタントマネージャー
奥西まゆみさん

それまでまったく宗教とは無関係だった方が、友達や先生の影響によって教会に通い、今では宗教部で働いているというのは感慨深いものがありました。人は、そのときのまわりの環境によって左右されるものなんだなと改めて思いました。

「あなたと私の価値」
日本基督教団世光教会牧師
世光福祉会理事長
新井　純先生

エラーコインの話が興味深かった。聖書の世界では、障がいのある人は罪人と呼ばれていたということを知って驚いた。しかもそう呼ばれていた理由が、罪を犯したからその罪の報いとして障がいがあったり怪我を負っていたりするのだ、という事も知って無茶苦茶な理由だと思った。

「どこにいるのか」
日本基督教団鳳教会牧師
三浦　遙先生

周りの人と比べて劣っている所があると周りの人に否定されたり、自分自身でも自分のことを否定してしまうことがあるけれど、同じ人間であっても違った環境で育って考え方や性格、苦手なことも得意なことも違うので周りと比べる必要はないのではないかと改めて思いました。

「信仰より愛?」
日本基督教団神戸雲内教会牧師
本間優太先生

献金で信仰が厚いか厚くないかが決まってしまうというのはどこでも同じなんだなと感じました。人によって金銭感覚は違うのに金額でどうこう言われてしまうのは悲しいことだと感じます。

「チャレンジのすすめ」
本学総務部付資料室職員
安田行秀さん

Mount Holyoke 大学は、すごく広くてびっくりしました。しかも学費も一千万超えているなんてすごいお金持ちじゃないと入れないなと感じました。コルビー宣教師のお墓が日本にあるのに驚きました。日本にあることですごく日本に貢献してくれたんだなと感じます。自分がしたいことに挑戦することは大切だと感じました。ちゃんと失敗してしまった時のことも考えておられてすごいと思いました。チャレンジの大切さを感じました。

アドベント音楽礼拝
「クリスマス・アドベントの歌」
本学合唱団OGの皆様
宗教主事　髙田　太先生

高校生の時『Gabriel archangelus』を歌ったのを思い出し懐かしく思いました。また、クリスマスの曲は好きなので聴けて良かったです。今まであまり意味も知らず聴いていたので、初めてどういう曲なのか知ることが出来ました。クリスマスまでの間、町中でクリスマスの曲を聴くのがより楽しみになりました。

「かのじょたちの決意」
日本基督教団石橋教会牧師
仲程愛美先生

マリア様のように自分にとって完璧な人は居ますが、そんな人が身近に感じるような出来事を私も経験した事があります。そんな時ダメだと思う自分が少し救われた気分になったことを思いました。これから困難な事があった際には打ちひしがれず、自分が完璧だと思う人にも困難に立ち向かって来たのだと鼓舞して頑張ります。

「主と共に生きる」
日本基督教団蒲生教会牧師
戸根裕士先生

信仰しているだけでは神は導いてくれないから共に生きるということはキリスト教だけのことではなく日常の事、当たり前なことに繋がるなと思いました。

クリスマス礼拝
「そこに愛はあるんです!」
日本基督教団南大阪教会牧師
尾島信之先生

クリスマスはイエス・キリストが産まれためでたい日で、きらびやかなイメージがありますが、唐突な妊娠のことを考えるとマリア様はとても大変な思いをしたのだと気付かされました。また、お話を聞いている間にハロウィンもそうですがクリスマスも日本人は本来の意味をわかってない人が多いなと感じました。

「いまここにいることに感謝する」
本学看護学科教授　香川由美子先生

今学んでいる分野とは違う看護の分野の話もあってとても興味深かったです。話の中で香川先生が自身の人生を振り返って「万事塞翁が馬」だと思ったというところがとても印象的でした。私も大学受験で第一志望に落ちました。そのときは自分の努力が足りなかったんだと落ち込みましたが、先生のお話のように失敗に落ち込むだけではなくその状況を自身の成長に繋げられるように努力していきたいです。また感謝の効用実験の話もおもしろかったです。私は「ありがとう」と言われると嬉しいので日頃から何かしてもらったりすると積極的に言うようにしているのですが、そういう実験結果を知るとさらに感謝したくなりました。これからも周りへの感謝を忘れずに日々過ごします。

「手を洗わない神」
日本基督教団天満教会牧師
小西　望先生

手を洗わないという題材でどういう話なのかなと思っていて、手を洗うことは日本でいう足を洗うという意味とおんなじでそれぞれの国で言い方って違ったりするんだなと驚きました。教会の道案内の写真がいつもと違って漫画みたいですごくいいなと思ったし、絵がすごく上手くてびっくりしました。一年間のチャペル・アワーは長いようで短くて一年を通して欠かさずしっかり視聴できたのでよかったです。

2022年度　チャペル・アワー講師一覧

（敬称略）

月	日	奨　励　題	略　　歴	奨 励 者
4	18	チャペル・アワーへようこそ	本学宗教主事	髙田　太
	25	喜ぶこと、祈ること、感謝すること	梅花学園学園長	近藤　十郎
5	2	思いきって生きよう	日本基督教団梅花教会牧師 梅花中学校・高校聖書科非常勤講師	山口　恒
	9	愛が実を結ぶ	日本基督教団南山教会牧師	村山　盛芳
	16	優しい思い出は未来への道しるべです。	止揚学園園長	福井　生
	23	なぜ学ぶのか	日本基督教団高槻日吉台教会牧師 梅花高校聖書科非常勤講師	吉岡　恵生
	30	隣人を自分のように愛する	社会福祉法人レバノンホーム理事長 日本基督教団池田五月山教会牧師	有澤　慎一
6	6	いけるみことばのままに	本学心理学科教授	閑喜　美史
	13	いのちのパン	日本基督教団京都教会副牧師	入　順子
	20	私のキリスト教体験	本学情報メディア学科教授	遠山　耕二
	27	真実に生きる	日本基督教団島之内教会牧師	木戸　定
7	4	世界のはじめから	日本基督教団近江金田教会牧師	横田　明典
	11	後で分かる恵み	日本基督教団宇治教会牧師	早瀬　和人
	18	世界を変える魔法の言葉	日本基督教団千里聖愛教会牧師	中島　正勝
	25	新しい掟	日本基督教団大阪教会牧師	本庄　侑子
9	26	君に届く	日本基督教団浪花教会副牧師	川江　亜希子
10	3	向上心を持ち続けて	梅花学園同窓会宗教委員長 茨木市立西公民館館長、人権擁護委員	浦野　祐美子
	10	今日のあなたの食卓には	本学情報メディア学科准教授	森　美由紀
	17	カトマンズの粉ミルク	日本基督教団尼崎教会牧師	桝田　翔希
	24	愛、深き淵（ふち）より。	本学宗教部宗教グループ アシスタントマネージャー	奥西　まゆみ
	31	あなたと私の価値	日本基督教団世光教会牧師 世光福祉会理事長	新井　純
11	7	どこにいるのか	日本基督教団鳳教会牧師	三浦　遙
	14	信仰より愛?	日本基督教団神戸雲内教会牧師	本間　優太
	21	チャレンジのすすめ	本学総務部付資料室職員	安田　行秀
	28	アドベント音楽礼拝 クリスマス・アドベントの歌	本学宗教主事	本学合唱団 OG 髙田　太
12	5	かのじょたちの決意	日本基督教団石橋教会牧師	仲程　愛美
	12	主と共に生きる	日本基督教団蒲生教会牧師	戸根　裕士
	19	クリスマス礼拝 そこに愛はあるんです！	日本基督教団南大阪教会牧師 日本基督教団大阪教区議長	尾島　信之
1	16	いまここにいることに感謝する	本学看護学科教授	香川　由美子
	23	手を洗わない神	日本基督教団天満教会牧師	小西　望

宗教部編集後記

今年も紅白の梅の咲く季節になりました。2022年度も新型コロナウイルス感染防止のためにチャペル・アワーは澤山記念館礼拝堂からリモート・ライブ配信と学科の区分を設け対面とで行うハイブリット形式で行いました。今年度も多くの学生・教職員の祈りに支えられて無事にチャペル・アワーを終了することができましたことを深く感謝いたします。そして、今一度、隣人に親切に対応できたかどうかを思い返しております。

2022年度は次の年間聖句が与えられ、チャペル・アワーの最初に学生・教職員と共に聖句を確認し、心に刻みながら、歩んでまいりました。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。
（テサロニケの信徒への手紙Ⅰ 5章16～18節）

学生・教職員の皆様のご協力により今年も「チャペル・ニュース」第19号を発行することが出来ましたことを心から感謝いたします。そして、今年度の締めくくりに『チャペル・アワー奨励集』を刊行いたします。ぜひ、手に取ってお読みいただけますと幸いです。

2023年度も「新しい歌を主に向かって歌う」実り豊かな「主の年」になればと思います。（O）